

## 生き方のスタイルに関する研究

——人生の選択場面での選択の様式における個人差——

筑波大学心理学系

落 合 幸 子

### 問 題

人生は様々な選択場面から成りたっていると考えられる。この選択場面での決定の仕方によって個人によって一貫した様式がないものであろうか。

「自分は今まで容易な道ばかり歩んできた。これではいけない、どうかしなくては、と思うが、これからもしっかりと同じような道をすすんでいってしまうだろう」(19歳 私立大学1年生 男子)。この手記を書いた学生は、様々な選択場面で容易な道を選んで歩んできたと自分を評価している。しかし逆に自分は困難な道ばかり選択してきたと評価する人間もいるのではないであろうか。本研究は、このような予測にたち、人には人生の選択場面で容易な道を選ぶタイプと、困難な道を選ぶタイプがあることを明らかにしようとした。

さらに、この選択様式の違いが、自分の過去・現在・未来に対する態度や感情にどのような影響を及ぼすかを明らかにしようとした。先にのべた学生は、自分の今までの生き方、これからの将来に対してマイナスの評価を下し、現在も不安定ではりのない生活をしている。容易な道を選ぶ者は、失敗もしないかわりに自分の真に納得しうる結果を得ていないために、過去・現在・未来に対して負の評価しかもてないのではないか。反対に、困難な道を選んだ者は、外からみればつまづきの多い人生であっても、本人は納得し、過去・現在・未来に対して正の評価をもつのではないかと予測される。従ってこの予測を検証することも目的とする。

### 調 査 I

#### 目 的

人生の様々な選択場面で困難な道を選ぶ者(以下 克服型と呼ぶ)と、容易な道を選ぶ者(以下 安全型と呼ぶ)とを分ける。また彼らが、自分の過去・現在・未来をどう評価しているかを明らかにする。

#### 方 法

被験者 都内私立女子短大1年 99名

#### 手続き

##### 1 選択様式の個人差テスト

⑦受験の時、自分の実力からは困難が予想される学校を

選んだか、安全圏の学校を選んだか。(実力以上・安全圏)

④適齢期を過ぎそうな時、親のすすめる比較的良条件の結婚話があった。やや気のすまない点はあるが結婚を承諾する可能性があるか。(拒否する・承諾する)

⑦あなたは、自分の生き方を困難な道を選ぶほうだと思うか、容易な道を選ぶほうだと思うか。(困難な道・容易な道)

④Aという独身男性があなたを愛してプロポーズした。しかしあなたはBという妻子のある男性を愛している。AとBのどちらを選ぶか。(Bを選ぶ・Aを選ぶ)

④あなたは、自分は正直に生きていると思うか、いっわりて生きていると思うか。(正直・いっわり)

⑦あなたは何かをやりとげたいという気持が強いですか。(非常に弱いから非常に強いまでの5段階評定)

④あなたは、失敗を恐れるほうですか。(非常に恐れるから、まったく平気の5段階評定)

以上、⑦から④までは、( )内の左側の選択肢を選択した場合を各1点とし、⑦は、非常に強いとやや強いのとどちらかに評定した者を1点、④は、まったく平気、かなり平気のどちらかに評定した者を1点として合計点を各個人の得点とした。満点は7点である。

##### 2 過去・現在・未来に対する態度・感情

⑦過去の生き方に対して納得しているか。(非常に納得からまったく納得していないまでの5段階評定)

④現在、次の感情をどの程度感じているかを問い、生きがい、幸福感、挫折感、孤独感、不安定感のそれぞれについて、非常に感じているから、まったく感じていないまでの5段階に評定させた。他に、安定している時と不安定なときのどちらがやる気がでるかも、安定しているほうがよいと不安定のほうがよいの2つのうち一方を選択させた。また、外見を気にするほうか否かを、ひじょうに気にするからまったく気にしないまでの5段階に評定させている。

⑦未来については、2項目ある。第一が、未来は自分できりひらくものであると思うか、運によって自然にひらかれるものと思うかであり、どちらか1方を選択させた。第二が、未来はぼくぜんとしているほうがよいか、具体的なほうがよいかであり、一方を選択させた。

表 1 克服型, 安全型の人数とその割合

選択様式の個人差	得点(7点満点)	人 数
困難な道を選ぶ者 (克服型)	4~6点	35名(35%)
容易な道を選ぶ者 (安全型)	0~2点	39名(40%)
そ の 他 (中間型)	3点	25名(25%)

表 2 受験の時選んだ学校

生き方スタイル	受 験	
	実力以上	安 全 圏
克 服 型	18人(56%)	14人(44%)
安 全 型	9人(24%)	29人(76%)

表 3 親のすすめる結婚

生き方スタイル	結 婚	
	拒 否	承 諾
克 服 型	31人(89%)	4人(11%)
安 全 型	17人(44%)	22人(56%)

結 果

1 選択様式の個人差テストの結果

テストの結果, 満点の者はいなかった。そこで表1に示すように, 4点から6点の者を克服型, 0点から2点の者を安全型とし, 残りの3点の者を中間型とした。以下は, このうち克服型と安全型の者のみを取りだし, 両者の違いを比較検討する。

各テスト項目別に, 克服型, 安全型の者が占める人数と割合を示す。

実力以上の学校を選んだか, 安全圏の学校を選んだかについて(表2)は,  $\chi^2$ 検定の結果, 両群間に有意な差がみられた( $\chi^2=7.775, df=1, p<0.1$ )。克服型の者の方が実力以上の学校に挑戦しているといえる。

親のすすめる結婚を拒否するか, 否かについて(表3)は,  $\chi^2$ 検定の結果両群間に有意差があった( $\chi^2=16.377, df=1, p<.001$ )。克服型の者の89%が拒否すると答えている。

自分の生き方は困難な道を選んでいるほうだと思いか, 容易な道を選ぶほうだと思いかについて(表4)は, 同様の検定の結果有意差がみられた ( $\chi^2=17.925, df=1, p<.001$ )。克服型は, 主観的にも自分を困難な道を

表 4 自分の生き方をどう思うか

生き方スタイル	生 き 方	
	困 難 な 道	容 易 な 道
克 服 型	25人(70%)	10人(30%)
安 全 型	7人(21%)	27人(79%)

表 5 恋 愛

生き方スタイル	恋 愛	
	不 倫 の 恋	安 定 し た 結 婚
克 服 型	16人(53%)	14人(47%)
安 全 型	2人(6%)	34人(94%)

表 6 やる気の程度

生き方スタイル	や る 気		
	や る 気 強 い	ど ち ら で も な い	や る 気 弱 い
克 服 型	33人(92%)	1人(3%)	2人(5%)
安 全 型	12人(31%)	10人(26%)	17人(43%)

表 7 失敗を恐れるか

生き方スタイル	失 敗		
	失 敗 平 気	ど ち ら で も な い	失 敗 恐 れ る
克 服 型	16人(49%)	9人(27%)	8人(24%)
安 全 型	0人(0%)	28人(76%)	9人(24%)

選ぶと考える者の割合が有意に高いことになる。

不倫の恋を選ぶか, 結婚できる独身男性を選び安定した結婚をするかについて(表5)は, 両群間に有意差がみられた( $\chi^2=18.832, df=1, p<.001$ )。安全型は, 独身男性を選ぶ率が高く, 94%に及んでいる。

やる気を自分で強いと評定している者とそうでない者の率を両群で比較した結果(表6), 両群に差がみられた( $\chi^2=28.926, df=1, p<.001$ )。克服型の方が自分をやる気が強いと評価している。

失敗を平気とする者の率を両群で比較した結果(表7), 両群間に有意差があった。克服型の者の半数は平気としているのに対して, 安全型の者には平気とする者が1人もいない。

## 2 過去・現在・未来についての態度・感情

過去の生き方を納得しているかどうかについての結果を表8に示す。納得している者その他の者との間には $\chi^2$ 検定の結果差はみられなかった。しかし、納得していない者とそうでない他の2群との間の差を $\chi^2$ 検定する

表8 過去の生き方を納得しているか

生き方スタイル	納得している	どちらでもない	納得していない
克服型	9人(26%)	13人(37%)	13人(37%)
安全型	6人(15%)	11人(28%)	22人(57%)

と、両群間に差のある傾向がみられた( $\chi^2=2.747$ ,  $df=1$ ,  $p<.10$ )。安全型の者は、克服型の者に比べ過去の生き方に納得していない者が多い傾向にあるといえよう。

現在生きがいを感じる程度について(表9)は、ひじょうに感じているとする者の数において、両群間に有意な差がみられた( $\chi^2=7.798$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。克服型の者のほうが、ひじょうに生きがいを感じているとする者が多くなっている。

現在幸福感を感じている程度について(表10)は、群間に差がみられなかった。

挫折感(表11)、孤独感(表12)、不安定感(表13)に関しては、両群間に統計的な差はみられなかった。

安定しているほうがやる気がでるか、不安定のほうがやる気がでるかについて(表14)は、安全型の者は有意

表9 現在生きがいを感じている程度

生き方スタイル	ひじょうに	かなり	どちらでもない	ほとんど	まったく
克服型	10人(29%)	8人(24%)	10人(29%)	5人(15%)	1人(3%)
安全型	2人(5%)	12人(31%)	14人(36%)	10人(26%)	1人(2%)

表10 現在幸福感を感じている程度

生き方スタイル	ひじょうに	かなり	どちらでもない	ほとんど	まったく
克服型	8人(24%)	15人(44%)	7人(20%)	3人(9%)	1人(3%)
安全型	9人(24%)	14人(37%)	11人(29%)	4人(10%)	0人(0%)

表11 現在挫折感を感じている程度

生き方スタイル	ひじょう	かなり	どちらでもない	あまり	まったく
克服型	3人(10%)	7人(21%)	12人(36%)	4人(12%)	7人(21%)
安全型	4人(10%)	11人(29%)	12人(32%)	6人(16%)	5人(13%)

表12 現在孤独感を感じている程度

生き方スタイル	ひじょうに	かなり	どちらでもない	あまり	まったく
克服型	3人(10%)	7人(20%)	10人(30%)	7人(20%)	7人(20%)
安全型	4人(11%)	12人(31%)	6人(16%)	6人(16%)	10人(26%)

表13 現在不安定感を感じている程度

生き方スタイル	不安定感				
	ひじょうに	かなり	どちらでもない	あまり	まったく
克服型	5人(15%)	11人(34%)	8人(24%)	4人(12%)	5人(15%)
安全型	7人(18%)	12人(31%)	10人(26%)	8人(20%)	2人(5%)

表14 安定と不安定どちらがやる気ができるか

生き方スタイル	やる気のできる状態	
	安定しているほうがいい...	不安定のほうがいい...
克服型	20人(57%)	11人(33%)
安全型	31人(89%)	4人(11%)

表15 外見を気にするか

生き方スタイル	外見		
	気にしない	どちらとも	気にする
克服型	4人(13%)	7人(23%)	20人(64%)
安全型	3人(8%)	2人(5%)	34人(87%)

表16 未来は自分の力か運によるか

生き方スタイル	未来は何の力によるか	
	自分の力による	運による
克服型	24人(75%)	8人(25%)
安全型	27人(71%)	11人(29%)

表17 未来はぼくぜんとしているほうがよいか, 具体的なほうがよいか

生き方スタイル	未来の具体性	
	ぼくぜんと	具体的に
克服型	24人(71%)	10人(29%)
安全型	31人(79%)	8人(21%)

に安定しているほうがやる気ができると答えている。  
( $\chi^2=5.417$ ,  $df=1$ ,  $p<.025$ ).

外見を気にするかに関して(表15)は, 気にすると答

えた者とどちらでもないと感じないと答えた者をあわせた結果との間の差を検定すると安全型の者の方が気にすると答えた者が有意に多くなっている ( $\chi^2=5.031$ ,  $df=1$ ,  $p<.025$ ).

未来に関する結果を次に示す。

未来は自分でできりひらくものか, 運によってひらかれるかについて(表16)は, 両群間に差がみられなかった。

未来は, ぼくぜんとしているほうがよいか, 具体的なほうがよいかについて(表17)も差はみられない。

過去, 現在に対する態度および感情に関する項目には差がみられたが, 未来に関しては差がみられなかった。

### 考察

克服型, 安全型の2つの型を, 7項目のテスト結果によって弁別した。7項目のうちの4項目は, 人生の大きな選択場面である受験と結婚を扱っている。しかし, 正直に生きているか否か, やる気の強さ, 失敗を恐れるかについての3項目は, やや意味が異なる。これらの項目は, 克服型の者は, 失敗を恐れず人生にやる気に満ちて立ち向かい, 自分は自分自身に正直に忠実に生きているという実感をもつ。逆に安全型の者は, 失敗を恐れてやる気を失っており, 人生の指針が自分に正直ということより波風がたたず平音にと願っているタイプと考えたために入れたものである。しかし, 克服型, 安全型が選択場面での選択のし方の個人差であるとの概念規定からすれば, この3つの項目は不適切と考えられる。本論文の調査では, この3項目を入れたまま結果を整理したが, これを除き選択場面を含む新たな項目を加えることが適当と考えられる。

次に, 安全型, 克服型と従来の心理学での理論との関係について考える。克服型, 安全型テストの項目の中にやる気の程度と失敗に対する恐れ程度の項目がある。ということは, この2つの型が達成動機と失敗回避動機に関係のあることを予想させる。Atkinsonのモデルではある課題に直面した時, 課題選択のし方は成功を求める動機づけ(Ms)と, 失敗を恐れそれを回避する動機づけ(Mf)の相対的強度に影響されると考えられている。そして  $Ms > Mf$  の者と  $Ms < Mf$  の者との要求水準の高さの違いなどが問題にされている。

安全型克服型と、達成動機、失敗回避動機との関係を考えて、安全型の者は、達成動機が低くて失敗回避動機の高い者、克服型の者は、達成動機が高く失敗回避動機が低い者であることが考えられる。従って、両タイプと達成、失敗回避動機との関係を明らかにしておく必要がある。さらに、達成、失敗回避動機の組み合わせによってできるH-H群（前が達成動機を表わし、後が失敗回避動機を表わし、Hはそれが高いこと、Lはそれが低いことを示す）、H-L群、L-H群、L-L群のそれぞれの群に入る者と克服型、安全型との関係も明らかにしてみたい。

克服型、安全型と過去・現在・未来に対する感情や態度との関係については次のとおりであった。

過去に対しては、安全型の者は過去の生き方に納得していないとする者が多かった。安全型の者は、外からみると安定した生活をしているようにみえても自分でできひらいた気のしない過去を納得していないのではないかという仮説を検証しているようである。

現在に対しては、生きがいを感じる程度において差がみられたが、幸福感、挫折感、孤独感、不安定感については差がみられなかった。生きがいについては、克服型に生きがいをひじように感じているとする者が多く、仮説を一部検証したことになる。

その他、安全型の者は、安定している方がやる気ができるとする者が多く、また外見を気にする者も多かった。人間に安定をもたらすのは、世間でひかれたレールにのっていること、多くの人々と同じであることであるとすると、彼らは世間で一般的とされる生き方を選ぶタイプの人間であるように思える。外見を気にするというのもそのあらわれかもしれない。人を自分自身に価値基準を置く型と世間の基準に価値基準を置く型に分ければ、安全型は後者で、克服型は前者であるといえるであろう。

未来に関しては、両タイプの間に差がみられなかった。調査Ⅱではこの未来に対する態度、感情について調べてみたい。近年時間的展望（未来についての見通し）の長さや質が問題とされているが、この点についての両タイプの差を明らかにする。

## 調査Ⅱ

### 目的

克服型の者と安全型の者では、将来についての見通しにどのような違いがあるかを明らかにする。将来の見通しについては、見通しの長さ、具体的にどんなことを将来の出来事として考えているかの2点から考える。

### 方法

被験者 都内私立女子短大1年 115名

### 手続き

#### 1 選択様式の個人差テスト

調査Ⅰに同じ。

#### 2 将来の見通しの長さに関する調査

①1カ月以内のこと、②1カ月から3カ月後のこと、③3カ月から6カ月後のこと、④6カ月から1年後のこと、⑤1年から3年後のこと、⑥3年から5年後のこと、⑦5年から10年後のこと、⑧10年から15年後のこと、⑨15年から20年後のこと、⑩20年以上後のこと。以上、⑦から⑩までの10項目について、いつも考えている、時々考える、まれに考える、まったく考えないの4つの中から選択させた。

#### 3 将来の見通しの具体性に関するテスト

①車を買うあるいは買いかえる、②長い休みをとる、③有名になる、④結婚する、⑤家を買う、⑥経済的に安定する、⑦就職する、⑧子どもをもつ、⑨仕事をもっとも充実する、⑩大金持になる、⑪最後の子どもをもつ、⑫さらに教育を受ける、⑬情緒的に安定する、⑭一番下の子どもが結婚する、⑮人生最大の目標に達する、⑯借金を返す、⑰離婚する、⑱初孫が生まれる、⑲死ぬ、⑳性的関心がなくなる、㉑身体が活動的でなくなる、㉒息子が人生最大の成功をおさめる、㉓退職する、㉔母が死ぬ、㉕老人になったと感じる、㉖父が死ぬ、㉗中年に達する、㉘病気になる、㉙いろいろと苦勞をする。以上29項目について、ありえない、起きると思うが考えられない、起きるであろう、もうすんだ、のうちから1つ選ばせた。

### 結果

#### 1 選択様式の個人差テストの結果

調査Ⅰと同様に克服型と安全型の者を抽出した。克服型35名(30%)、安全型46名(40%)、中間型34名(30%)であった。

#### 2 将来の見通しの長さに関するテスト結果

1カ月以内のことについて考える程度に関する結果(表18)は、克服型は、まったく考えないとする者が69%を占め、安全型の者より有意に多かった( $\chi^2=3.863$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ )。しかし、どちらの群も、1カ月以内の身近なことはあまり考えない傾向がでている。

1カ月から3カ月後のことについて考える程度について(表19)は、両群間に有意な差はみられなかった。

3カ月から6カ月後のこと(表21)、6カ月から1年後のこと(表20)について考えている程度に関しても、両群間にほとんど差がみられない。

1年から3年後のことについて考えている程度(表21)については、いつも考えるときどき考えるを合わせ、まれに考えるとまったく考えないを合わせて2群間の差を検討した。その結果、安全型の者のほうが、いつも考

表18 1カ月以内のこと

生き方スタイル \ 1カ月以内	いつも	ときどき	まれに	まったく
克服型	0人 (0%)	1人 (2%)	10人 (29%)	24人 (69%)
安全型	1人 (2%)	0人 (0%)	20人 (44%)	25人 (54%)

表19 1カ月から3カ月後のこと

生き方スタイル \ 1カ月から3カ月	いつも	ときどき	まれに	まったく
克服型	0人 (0%)	8人 (23%)	18人 (51%)	9人 (26%)
安全型	2人 (5%)	8人 (17%)	28人 (61%)	8人 (17%)

表20 3カ月から6カ月後のこと

生き方スタイル \ 3カ月から6カ月	いつも	ときどき	まれに	まったく
克服型	2人 (6%)	16人 (45%)	15人 (43%)	2人 (6%)
安全型	4人 (9%)	19人 (41%)	19人 (41%)	4人 (9%)

表21 6カ月から1年後のこと

生き方スタイル \ 6カ月から1年	いつも	時々	まれに	まったく
克服型	2人 (5%)	12人 (35%)	17人 (50%)	3人 (10%)
安全型	2人 (4%)	16人 (35%)	23人 (50%)	5人 (11%)

表22 1年から3年後のこと

生き方スタイル \ 1年から3年	いつも	ときどき	まれに	まったく
克服型	1人 (3%)	6人 (17%)	20人 (57%)	8人 (23%)
安全型	5人 (11%)	11人 (25%)	23人 (51%)	6人 (13%)

えているときどき考えるをあわせた者の率が克服型の者よりも高い傾向がみられた ( $\chi^2=2.326$ ,  $df=1$ ,  $20 < p < .10$ ).

表23 3年から5年後のこと

生き方スタイル \ 3年から5年	いつも	ときどき	まれに	まったく
克服型	4人 (11%)	12人 (34%)	11人 (31%)	5人 (14%)
安全型	5人 (11%)	26人 (58%)	13人 (29%)	1人 (2%)

表24 5年から10年後のこと

生き方スタイル \ 5年から10年	いつも	ときどき	あまり	まったく
克服型	10人 (29%)	17人 (49%)	7人 (20%)	1人 (2%)
安全型	17人 (38%)	21人 (47%)	6人 (13%)	1人 (2%)

表25 10年から15年後のこと

生き方スタイル \ 10年から15年	いつも	ときどき	あまり	まったく
克服型	14人 (41%)	16人 (47%)	8人 (9%)	1人 (3%)
安全型	26人 (58%)	16人 (36%)	2人 (4%)	1人 (2%)

表26 15年から20年後のこと

生き方スタイル \ 15年から20年	いつも	ときどき	あまり	まったく
克服型	16人 (46%)	15人 (43%)	3人 (8%)	1人 (3%)
安全型	28人 (61%)	15人 (33%)	1人 (3%)	1人 (3%)

5年から10年後について考えている程度 (表24) については、統計的な差はみられなかった。

3年から5年後のことを考える程度について (表22) も、いつもときどきを合わせたものとまれにとまったくを合わせたもので両群間の差を検討した。その結果、やはり安全型の者のほうが、いつもあるいはときどき考えるとする者の率が高い傾向がみられた ( $\chi^2=2.805$ ,  $df=1$ ,  $p < .10$ )。

10年から15年後のこと (表25) と、15年から20年後のこと (表26) に関しては、いつも考えていると他の者とを分けて2群間で比較した結果、10年から15年後 ( $\chi^2=2.168$ ,  $df=1$ ,  $.20 < p < .10$ ) にも、15年から

表27 20年以上後のこと

生き方 スタイル	20年以上 後			
	いつも	ときどき	あまり	まったく
克服型	15人 (44%)	14人 (41%)	5人 (15%)	0人 (0%)
安全型	25人 (55%)	19人 (41%)	1人 (2%)	1人 (2%)

表28 克服型の者の将来の見通しの長さ

見通しの 長さ	考える 程度	程度			
		いつも	ときどき	あまり	まったく
1カ月以内のこと		0%	2%	29%	69%
1カ月から 3カ月後のこと		0	23	51	26
3カ月から 6カ月後のこと		6	45	43	6
6カ月から 1年後のこと		5	35	50	10
1年から 3年後のこと		3	17	57	23
3年から 5年後のこと		11	34	31	14
5年から 10年後のこと		29	49	20	2
10年から 15年後のこと		41	47	9	3
15年から 20年後のこと		46	43	8	3
20年以上後のこと		44	41	15	0

20年後 ( $\chi^2=2.592$ ,  $df=1$ ,  $.20 < p < .10$ ) にも差のある傾向がみられた。

20年以上後のことについて(表27)考えている程度については、いつもとときどき、あまりとまったくを合わせた結果を2群間で比較したところ差のある傾向がみられた ( $\chi^2=2.592$ ,  $df=1$ ,  $.20 < p < .10$ )。安全型のほうが、20年以上後のことを考える傾向がみられる。

全体を通してみると、安全型の者のほうが将来についての見通しをもっている傾向があるといえよう。

次に、1カ月以内から20年以上後までのそれぞれの時期について考えている程度を全体を通してみてる。克服型の者の結果のみを表28に示す。最初、このテストでは、近い将来のほうがいつも考えている程度が高く、遠い将来になるにつれ考えている程度が低くなると予想していた。しかし結果は逆に遠い将来ほどよく考えると評定されることがわかった。20年以上後といってもこの被験者にとっては40歳以降をさしている。もし、見通しの長さを30年、40年、50年と長くすれば、彼らが将来どの程度の範囲まで見通しをもてるか、その限界を明らかにできたのかもしれない。こうしたテストの不備もあって

表29 将来大金持になれるか

生き方 スタイル	大金持		
	ありえない	起きると思 うが考えら れない	起きる であろう
克服型	8人(26%)	14人(45%)	9人(29%)
安全型	10人(22%)	11人(25%)	24人(53%)

表30 最後の子どもをもつ

生き方 スタイル	最後の子 どもの 誕生	程度		
		ありえない	起きると思 うが考えら れない	起きる であろう
克服型		1人(3%)	18人(58%)	12人(39%)
安全型		1人(2%)	14人(2%)	31人(76%)

表31 さらに教育を受ける

生き方 スタイル	教育を 受ける	程度		
		ありえない	起きると思 うが考えら れない	起きる であろう
克服型		11人(33%)	14人(43%)	8人(24%)
安全型		29人(65%)	10人(22%)	6人(13%)

表32 一番下の子どもが結婚する

生き方 スタイル	末子の 結婚	程度		
		ありえない	起きると思 うが考えら れない	起きる であろう
克服型		3人(9%)	20人(63%)	9人(28%)
安全型		1人(2%)	19人(44%)	23人(54%)

将来の見通しの長さの違いは両群間であきらかにはできなかった。従ってこの結果は見通しの長さというより、将来について考えている度合いといったほうがよからう。

### 3 将来の見通しの具体性に関するテスト

具体的な将来の見通しの中で、群間に有意差のみられた項目についての結果を次に示す。

もうすんだとする答えは、全項目になかったのでけすった。

将来大金持になれるかについて(表28)は、安全型の者に起きるであろうとする者が多くみられた。起きると思  
うが考えられないとする者とありえないとする者をあ

表33 有名になる

生き方スタイル	有名になる		起きると思 うが考えら れない	起きるで あろう
	ありえない	あり		
克服型	26人(74%)	9人(26%)	0人(0%)	
安全型	41人(89%)	5人(11%)	0人(0%)	

表34 結婚する

生き方スタイル	結婚する		起きると思 うが考えら れない	起きるで あろう
	ありえない	あり		
克服型	1人(3%)	9人(26%)	25人(71%)	
安全型	0人(0%)	6人(13%)	39人(87%)	

わせて、起きるであろうとする者との差を2群間で比較したところ $\chi^2$ 検定の結果有意差がみられた( $\chi^2=4.412$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ ).

最後の子どもをもつことについて(表29)も同様の検定を行なった結果、安全型の者のほうが起きるであろうとする者が有意に多い( $\chi^2=6.178$ ,  $df=1$ ,  $p<.02$ ).

さらに教育を受ける可能性について(表30)は、ありえないとする者が安全型に多くみられた( $\chi^2=7.376$ ,  $df=1$ ,  $p<.02$ ).

一番下の子どもが結婚するについて(表31)は、起きるであろうとするものが他の2反応に比べ安全型に多くみられた( $\chi^2=4.825$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ ).

安全型の者は、大金持になること、子どもに関することについて将来の見通しをもっており、克服型の者は、教育を受けることについて考えられるとしていることになる。

次に10%水準で差のある傾向をみせた項目についての結果を示す。

有名になることについて(表33)は、ありえないとする者が安全型に多い傾向がみられた( $\chi^2=3.064$ ,  $df=1$ ,  $p<.10$ ).

結婚するについて(表34)は、起きるであろうとする者が安全型に多くみられた( $\chi^2=2.857$ ,  $df=1$ ,  $p<.10$ ).

その他の項目について両群間に大きな差はみられなかった。

### 考察

克服型、安全型両タイプの者の将来の見通しの程度や質については次のことがわかった。先にのべたように何年先のことまでは考えるがそれ以降のことは考えないと

いう形での将来の見通しの長さにおける両群の差は明らかにできなかった。しかし、将来について考えている度合の差はみられた。1カ月以内のことを考えている程度に関しては、克服型の者にまったく考えないとする者が有意に多くみられた。克服型の者が1カ月以内という近い将来のことを考えないという結果は、彼らが比較的無鉄砲でその場その場で自分の気持のままに行動するという側面をあらわしているのかもしれない。有意な差ではないが、1年から5年後のこと、10年以上先のことについて安全型の方がよく考えるという傾向がみられた。差がないのは、1カ月から1年後までと、5年から10年後のことであった。差のある時期と差のない時期のある理由については明確ではないが全体として、克服型よりも安全型の方が将来について考えているとはいえよう。

具体的に将来のどんな事柄を考えているかを両群で比較した結果、安全型は、大金持になること、最後の子どもが生まれること、一番下の子どもが結婚すること、自分の結婚の4点について将来ありうることと考えている。それに対して克服型はさらに教育を受ける、有名になるの2点について将来の可能性を強く感じている。差のある項目をみると安全型は、大金持になることを除き、結婚と子どもという女性の役割に関連した事柄を将来可能な出来事ととらえている。大金持になることも、克服型の、さらに教育を受ける、有名になる、に比べると受身的である。克服型の者はそれに対して、さらに教育を受ける、有名になるという可能性が高いとみている。この2つとも、いわゆる女性的とは世間からみなされない事柄である。こうしてみると、安全型の者は、女性的と認められている役割を自分の中に取り入れている者で、克服型の者は男性的と認められている役割を自分の中に取り入れようとしている者であることがうかがえる。本調査の被験者は女子であったが、男子の場合にどうなるかも興味のある問題である。

ところで、女子は思春期になって女性の役割を理解するようになるとやる気を失い学業成績が低下するといわれている。学業成績が高い、ひいてはその結果男性を負かす可能性があるということは女性らしさに反することであり、そのため学業へのやる気を失うとされている。克服型、安全型とはやる気の高低だけで分類できるものではない。しかし、克服型の者のほうがやる気が高く、安全型の者のほうがやる気は低いという結果は調査I、IIで示された。だとするとやる気の強い克服型の者が男性的役割を受け入れ、やる気の弱い安全型の者が女性的役割を受け入れるという結果は、克服型と安全型の形成と女性的役割の受容との因果関係の問題を浮きあがらせる。女性的役割を受け入れることによって克服型、安全型になっていくのか、克服型、安全型だから女性的役割を受容したり拒否したりするのか、こうした問題も検討



の余地があろう。

### 要 約

人生の種々の選択場面で、困難な道を選ぶ者(克服型)と容易な道を選ぶ者(安全型)の存在を明らかにし、彼らの過去、現在、未来のとらえ方の差を調べた。対象は女子短大1年生である。

克服型、安全型は、受験、結婚などの重要選択場面での選択の仕方を測定することによって決定した。両群の過去、現在、未来のとらえ方の差は次の通りである。

- 1 安全型の者は過去の生き方に納得していない者が多い。
- 2 克服型の者は、現在ひじょうに生きがいを感じてい

るという者が多い。

- 3 安全型の者は安定している方がやる気かでて、克服型の者は不安定の方がやる気がでると答えている。
- 4 安全型の者は外見を気にする者が多い。
- 5 安全型の者は、将来について考える度合いが強い。
- 6 安全型の者は、子ども、結婚のことについて考え、克服型の者は、将来の教育を受ける可能性、有名になることについて考える。

### 参 考 文 献

- Bollnow, O. F. 1972 Das Verhältniß zur Zeit ein Beitrag zur pädagogischen Anthropologie.  
森田孝訳 時へのかかわり 川島書店

—1478. 10. 11. 受稿—

## SUMMARY

### A Study on the Styles about a Way of Life

Yukiko Ochiai

The University of Tsukuba

This study purposed to show two styles about a way of life which overcome or hesitate all difficulties in life and to invest the feelings and the attitudes of their past, present and future.

The Ss are 214 junior college students. Two types are determined by the test which measures a way of selection at the scene of a entrance examination and a marriage, etc.

Major results were as follows.

1. "Hesitate" style-students are not convinced of a way of life in the past.
2. "Overcome" style-students are find themselves

worth living in the present.

3. "Hesitate" style-students are motivated when they are stable and "overcome" style-students are motivated when they are unstable.
4. "Hesitate" style-students keep up appearances.
5. "Hesitate" style-students anticipate what is to come in the future.
6. "Hesitate" style-students think of children and marriage, and "overcome" style-students think there are a fair chance to become famous and to accept more education in the future.